

# タッチ&トライ体験型イベント

## 「0円ぱちんこパーラーサミー」

サミー（東京都豊島区）は17日、パチンコ初心者・未経験者を対象にしたタッチ&トライ体験型イベント「0円ぱちんこパーラーサミー」を実施する旨、発表した。

同試みは、従来のファンイベントとは一線を画し、パチンコに触れたことのない未経験者や長い間パチンコ遊技から離れていた元ファンを対象に、大衆娯楽として広まったパチンコを心ゆくまで楽しんでもらうもの。

リリースには、玉箱を持った父親と、お菓子などの景品が詰まった茶色の紙袋を抱えて寄り

添う少女を描写。パチンコが娯楽の雄として多くの人々に愛されていた昭和の時代をイメージさせるデザインとなっている。

「0円ぱちんこパーラーサミー」では、まさに当時の「古きよきパチンコ」の楽しさを提供。遊技する面白さにとどまらず、パチンコ遊技の醍醐味の1つでもある景品獲得の喜びを通じて、パチンコ遊技そのものの魅力をアピールする。

なお、同イベントは11月27日にクラブセガ秋葉原新館（東京都千代田区）、12月4日にサミー東京支店（東京都台東区）、

12月11日にサミー大阪支店（大阪市浪速区）にて催され、パチンコ無料体験の結果、大当たり回数や出玉数に応じて景品と交換できる。18歳以上は参加自由。

一方、日本遊技関連事業協会（日遊協、会長・庄司孝輝氏）は16日、厚生労働省の受動喫煙防止対策強化に対する公開ヒアリングに出席。「業種の取り扱い」「風営法業種特有の事情への配慮」「多様な施策と十分な準備期間について」「アイコスなどの新しいタバコの取り扱いについて」等、意見を述べた。

（ニュース提供・LOGOS×娯楽産業）

## 遊技産業の視点 Weekly View

### 岸本 正一



ホールマーケティングコンサルタント  
LOGOSプロジェクト上級研究員

大型連休となる年末年始。多くの国民が義務的時間から解放されて余暇を楽しむ。パチンコホールも例外ではなく、参加人口が減少したとはいえ普段よりも多くの客でホールがにぎわう。しかし、今回の年末年始に限っては、今後の市場を占う上で極めて重要な期間となる。

最大の理由は、いわゆる「パチンコ機の撤去回収問題」。年内に撤去回収しなければならない機種の中には、マックスタイプの人気機種も多く含まれている。すでに大勢のプレーヤーが「年内で撤去されるらしい」との情報を得ているようだが、彼らの大部分にはその詳細な理由や経過、あるいは決定事項に関する情報は届いておらず、噂話として捉えているプレーヤーもいる。筆者が懸念するのは、事前情報の理解度にかかわらず、これらの遊技機が撤去されたという事実を目の当たりにしたとき、プレーヤーがどのような実感を抱くかということにある。マックスタイプが撤去されたという「喪失感」がその後のプレーヤーの遊技参加に、急激なブレーキとして作用する可能性は否定できない。

つまり、今回の年末年始はパチンコ業界にとって、マックスタイプが無くなった後の市場を占うための重要なテストマーケティング期間となってくる。「センター」が引退したアイドルグループが、すかさず次の「センター」を決定して「推す」ように、パチンコ業界も年末年始を利用して新しい何かを推す努力をしなければならない。

問題はそれが何かということ。遊技参加人口を回復基調にするためにも、ここはマックスタイプのような「長時間大量獲得型遊技機」の延長ではなく、新たな概念を採用したいところ。性能がマイルド化した遊技機を、「新マックス」などと呼んだところで、プレーヤーは以前の「センター」の魅力を再認識するだけだ。

筆者の提案は「短時間快感体験型遊技機」という概念。短時間遊技であってもパチンコのスリルを味わうことができるという新しい概念が、業界の「センター」として人気を博す明日が望まれてならない。

## 迫る人気機種撤去 次の魅力打ち出せるか



きしもと・しゅういち 1963年生まれ。元SEの経験を生かし、遊技場の集客メカニズムを論理的に整理・研究する傍ら、全国のパチンコホールを対象にコンサルティングを行う。雑誌への連載やテキストの出版、セミナーでの講演なども手掛ける。オベーション代表。

### 写真にスマホをかざしてください



紙面連動アプリ「メディアトリガーplus」（無料）を起動、コンテンツ一覧から「かざす」をタップ。マークのついた写真を取り込むと、関連した情報サイトが閲覧できます。iPhone、Androidいずれもご利用可能です（一部対応しない機種があります）。

#### ※メディアトリガーplusの注意点

- ・本サービスはGPSデータを含むアクセス情報を取得しています。
- ・携帯電話回線を使っている通信費用はご利用者の負担になります。

## PCSA、メーカー招き公開経営勉強会

### ピックアップ

パチンコ・チェーンストア協会（PCSA、代表理事・金本朝樹氏）は18日、東京都千代田区のCIVI研修センターで第15期第2回臨時社員総会および第58回PCSA公開経営勉強会を開催した。

総会の冒頭、あいさつで金本代表理事は、遊技機の射幸性抑制に伴う市場シフトや、遊技くぎ問題への対応など、産業として転換期を迎えた遊技業界の2016年を振り返り。さらに12月末に期限を迎える回収対象遊技機の市場からの撤去について触れ、「年内撤去は警察庁が要請したもの」であることを強調するとともに、100%撤去に向け業界を挙げて取り組み、社会に評価される結果を導く必要があると呼びかけた。加えて、このような過ちを二度と繰り返さない環境整備の重要性を指摘した。

また、臨時総会の後、同会場で公開経営勉強会「遊技機メーカーの今後の戦略」を実施。200人近くの聴講者が訪れるなか、パチンコメーカーからは、今年、創立50周年を迎えた藤商事の経



勉強会には大勢の業界関係者が詰め掛けた

営企画本部広報・IR室長の枝吉純嗣氏が、パチスロメーカーからはユニバーサルエンターテインメント執行役員マーケット戦略室長兼日本アミューズメント放送代表取締役の長谷川崇彦氏が講演に臨んだ。先に講師を務めたのは藤商事の枝吉氏。同社は1966年にじゃん球遊技機メーカーとして誕生した後、73年にアレンジボール事業に参入。89年にパチンコ遊技機事業をスタートさせ、03年にはパチスロ遊技機の製造・販売を開始し、総合遊技機メーカーとしての礎を築いた。この独自性の強い企業の歩みを背景に、他社にはできないことや新規性を重視した開発姿勢が特徴となっている。

今後のパチンコ市場については、ゲーム性でのバリエーション増がメインになると指摘。そ

他の遊技機を含め、同一化を回避する可能性の追求が不可欠な開発環境になると伝えた。

これに続き、ユニバーサルエンターテインメントの長谷川氏は、遊技機開発・製造・販売に関しては、社長直轄の開発体制であることを紹介。現場に権限がほぼすべて任されており、決断の早さも特徴だと説明した。また、開発基本コンセプトは「開発者のベスト・市場のベスト・出玉のベスト」。市場ニーズに疑問符がついても、開発者がどうしてもやりたいチャレンジはする。マーケティングだけに捉われないが、マーケティングから得られる情報を徹底的に数値化して把握し、リアルとして開発や販売に役立てると、全方位からの開発姿勢をアピールした。

### 業界団体だより

## 全日遊連、年末の市場シフトヘラストサポート

全日本遊技事業協同組合連合会（全日遊連、理事長・阿部恭久氏）は16日、東京都港区の第一ホテル東京で11月度理事会を開催。翌17日には、東京都新宿区の遊技会館で理事会の内容を伝える記者会見が開かれた。

事務局によると、今回の理事会では、決議事項として来年の全国パチンコ・パチスロファン

感謝デーにおける幹事商社の選定を実施。また、他ホール団体および遊技機メーカー組合、遊技機販売業者組合による9団体連絡会議の開催結果報告、厚生労働省の「受動喫煙防止対策の強化について（たたき台）」への対応など、16項目にわたる報告事項があったと伝えられた。

質疑応答では、年末に期限を

迎える回収対象遊技機（パチンコ）の撤去に話題が集中。警察庁の要請のもと行われる市場シフトの完遂に向け、（万一）撤去回収期日を守れなかったパチンコホールに対しては、17日に開かれた中古機流通協議会において「撤去日から6カ月間、中古遊技機（パチンコ・パチスロとも）に関する保証書の発給停



止措置を講ずることができる」との取り決めが行われた旨、伝えられた。

厳しい表情で記者会見に臨む全日遊連の阿部恭久理事長（左）